断片

世界観

・現代の設定

・主人公は記憶の研究をしている。

・主人公は男であり、息子がいる。妻とは別居中。

・宗教団体「ドミナートル」なる物が存在していて、彼らは「神は自分たちである。」と主張している。表向きには活動しておらず、彼らの存在を知る物はほとんどいない。

主人公

・真面目で優しい性格で、争いごとや賭け事などは好まない。

・記憶の研修をしており、記憶の改変を可能にできる知識と技術をもっている。

・口調は少し強め、怒っているわけではない。

教祖

・ドミナートルの教祖。普段は姿を見せることはないが、Aとはよく面会しているらしい。変声期を使っており、この人物の性別などは不明である。記憶の改変をしドミナートルを世界の共通宗教にしようとしている。

A

・ドミナートルの重要幹部。主人公との連絡役であり、教祖の育て親でもある。基本的には教祖に従順であり、愛している。

主人公の息子

・主人公の息子であり、世界各地にボランティアで飛び回っている。

あらすじ

かつての宗教世界大戦から100年のときが経過しようとしていた。ときおり小さな争いは起こるが世界大戦時の面影はもうない。宗教の自由化も進み人々は平和と自由の道を歩みつづけているのだ。そんな平和な世界で一人記憶の研究をする男がいた。その研究者は記憶操作による精神的病の治療を目的としており、彼の技術や知識は世界からも認められつつあった。しかし記憶の操作というのは決して好まれるものではない。各団体や他の研究者たちからは批判の声が相次いだ。それでも彼は研究を辞めるということはしない。世界のどこかで困っている人がいるなら手を差し伸べてあげたい、そう思っているからだ。そんな彼にある団体から力を貸してほしいという旨のメールが届いた。その団体は「ドミナートル」と名乗る宗教団体のようだ。彼は怪しいと思いながら承諾するのであった。

始まり

じめじめと湿った空、夏の訪れをささやくように火照る地。今は7月だというのにどうも梅雨が抜けきっていない。ましてや湿気が強くなっているのではないかと思わせるくらいだ。しかも暑い、暑い、とても暑い。仕事をすっぽかしたくなる天気。しかしそんな弱音を吐いている暇はない。今日も今日とて仕事、研究だ。いつものように朝8時に起きて、食事、洗顔、着替えを済ませ職場へ向かう、私の職場・・・そう研究室へ。

研究室には徒歩で向かうようにしている。そしてルートもいくつかのパターンを用意してその日ごとに変えている。これといった理由は特にないのだが、毎日違うルートを通ることで新しい発見ができるのではないかと思っていたりする。まぁ気休め程度のものだ。今日も昨日とは違うルートで通勤していたのだが、いつもと違う感じがした。いや、まぁルートが違うのだから何か違うのは当たり前なのだがそういった違和感ではなかった。誰かに監視されているような感覚。あたりを飛んでいる鳥や寝転がっている猫、すべてのものが私を監視しているそう思えて仕方がなかった。私は怖くなり速足で研究室へと向かった。こんな歳にもなって視線が怖いという感覚に支配されるとは・・・

「私もまだまだ若いかもしれないな。」

研究室で

研究室についた。速足で来たせいか体に疲労がたまっているような気がした。

「若いなんて笑えないジョークだな・・・。」

顔に浮かべた苦笑いとともに私はデスクにあるPCに目を向けた。PCには一件のメールが届いていた。普段メールなんてものはほとんどこないので少し驚いていた。こんな変わり者にメールなんてどんなもの好きなのだろうか。と思う反面、先ほどおこった不可思議な事態と何か関係しているのか？と深読みをしていた。メールが来ることはおかしなことではないのだが、もう１年以上メールは届いていなかった。そんな久しぶりのメールと同じタイミングで不可思議なことが起こる。これは偶然なのだろうか・・・。

いかん、いかん研究者としての悪い癖が出てしまった。そう思い私はメールに目を通すことにした。差出人はとある宗教団体のようだ。その名は「ドミナートル」聞いたことのない宗教団体だ。そもそも宗教についてあまり興味がないので知らないのは当前なのかもしれない。それに100年前に起こった世界宗教戦争の影響で世の中は宗教団体に嫌悪感を抱いている。そんな世の中で宗教に詳しいというのは利己的ではないのだ。気になるメールの内容はこうだった。

「あなたが記憶について研究していると聞きました。是非ともその研究に協力させてほしいのです。」

とのことだった。私はあまり論文を世の中に発信してはいないので「ドミナートル」がどこで私のことを知ったのか疑問だった。確かに過去の論文を見れば辿り着くことができるとは思うが、私の論文は有名でもない。ましてや同じ界隈の人たちですら知っているか怪しいのだ。それになぜ協力してくれるのかということもこのメールからは伝わっては来ず不信感だけが漂っていた。しかし研究に人手が足りていないのは事実だ。私は話を聞いてみようと思った。が、その前に相手のことを知らないのもあれなのでとりあえず調べてみることにした。しかし調べるといってもどう調べればいいのかわからなかった。このご時世に堂々とネット上に自身のサイトなどを公開している宗教団体は多くはないだろう。しかしそうとなると各方面との交友関係の乏しい私では情報を得ることはできないだろう。

「いや待てよ、一人だけ頼れるやつを知っているぞ。」

世界各地にボランティアへ飛び回り深くて広い交友関係をもっている人物。そう私の息子だ。あいつなら何か知っているかもしれない。しかし大きな問題があった。息子とはもう１年以上は連絡を取っていない。

そう、今回のメールが届くまでの間、私にとって最も新しいメールでのやり取りが1年以上前の息子とのメールである。そんな悲しいことはさておき本題に戻ろう。どうやって連絡をとるものか。メールはアドレスが変更されている可能性があるし、電話番号は確か聞いていたような気もするが電話帳には登録されていない。うーむ、困った。うーーーーーーーん、ん？そうかこういう時こそネットの力を借りるときか。そう思い私はPCと向き合い始め息子の名前を検索に懸けた。

「ビンゴ！」

息子が作ったであろうサイトを発見し、そこに連絡先が書いてあるではないか。電話は繋がる気がしなかったのでとりあえずメールを打つことにした。返信が来るまでの間私は昨日まで取り掛かっていた研究に戻ることにした。

息子からの連絡

研究に戻ってからはや5時間くらいが経過しようとしていた。今日の研究は人の心と記憶の関連性についてだ。このテーマはとても難しく、分野にごとに見解は違い明確な答えがない。それはそうだ、心なんて存在しているようで存在していないものなのだから。

「心を具現化できればもっと捗るんだがなぁ。」

そんな絵空事を浮かべながら私はコーヒーを手に取った。私にとって何か考え事をしながらコーヒーを口にするのは幸せなことで、毎日その瞬間を楽しんでいる。今日も又コーヒーを口にしようとした時だった。PCの通知音が鳴る。私はPCの方へ目を向け確認する。先ほど息子に送ったメールの返信だった。長い間連絡を取ってなかったからか返ってきた喜びというか親としての心配というか、様々な感情が込み上げてきたが今回はそういった家族らしいものではなく、ビジネスに近い話だ。返信の内容はこうだ。

「久しぶり、元気そうで何より。こっちも元気でやってるよ。で、本題の宗教団体のことだけどこっちでも調べて見たけどいまいち有力な情報がないな。信用できるかできないかを判断できるに至れないって感じかな。力になれなくて申し訳ないが、一つだけ忠告を。今の情勢で宗教団体に加担するとなると痛い目に合うかもしれない、どうするかは親父に任せるけど心配してるやつもいるってことを心のどこかに置いといてくれ。じゃあまた何かわかったら連絡するよ。追伸　たまには母さんにも連絡したら？」

ううっ。私の目には涙のようなものが浮かんでいた。

「こいつも立派に育ちやがって。生意気な口も利けるようになったもんだ」

何とも言えないような感情で心が支配されそうになっていたが、すぐさま私は正気に戻った。こいつでもわからないとなると直接話す以外は素性がわかりそうにないな。しかし息子の言うようにこのご時世に宗教団体とかかわるのは得策ではない、他の研究者から不信を買うかもしれない。私自身は宗教に対して差別などの感情を抱いているつもりはないし、存在していても問題ないと思っている。だが、世間の目はそうではない、私一人の言動で周りに迷惑だってかかるかもしれない。もう少し考えてみることにした。

Aとの面会

例のメールが届いてから3日が経とうとしていた。私はまだ迷っていた、受けるべきなのか断るべきなのか。話を聞くだけならいいと思う自分もいるが触らぬ“神”に祟りなしという言葉もある。

「神か・・・。」

無宗教の私にとって神というのは具体的なものではない。あくまでも神という言葉に人々が自分の理想や願いを模っているという認識でしかない。偏った考えではあるが別に否定しているわけではない。人には十人十色の思想がある。人が何を信じて、何を拒もうがそれは自由なのだ。こんな思考をもう何周しただろうか、私にとって今回の件はとても厄介なものだった。しかしそんな巡り巡った思考の中で一つのゴールへとたどり着いた。私の認識を一度崩してみるべきだと。私の研究している記憶というものは実に曖昧であった。記憶というのはその人個人に宿る物であって他者と共有することはできない。思い出の共有という言葉もあるが本当に共有しているのではなくあくまでも伝達の一種である。話がそれてしまった。何が言いたいかというと私はこのような一つの仮説などに固執してしまう癖がある。信念が固いというか頑固というか。一度どこかのタイミングで自分を変えるべきだとおもってはいたが他者との交流が少ない私はそのタイミングが来なかった。だが今がそのタイミングなのではないだろうか。一度見方を変えてみる、そうすれば世界が広がるかもしれない。そんな淡い期待を込めて。

「よし・・・。」

私はそういってPCの前に腰を下ろした。そして3日前のメールを開き承諾の旨を伝えることにした。